すんでいるところを見る

浅瀬にいるウグイの稚魚

アイヌ語名は（　）内に

上流・中流・下流

山の方の冷たく流れの速いところ、平らなところで波立たずゆっくり流れるところ。同じ川でも上流と下流ではその様子はまるで違います。魚もそれぞれすむところを選んでいるようです。水温・川底の様子・川の形・植物…。それぞれの基準はなんでしょうか。

上流 → 下流

深い浅い（淵と瀬）が連続していて、水面が波立つ。低温

深い浅い（淵と瀬）があまりなく、水面が少し波立つ

深い浅い（淵と瀬）があまりなく、水面がほとんど波立たない

オショロコマ（オソルコマ）

ヤマメ（ポンイチャニウ、イチャンコツ）

ワカサギ（シルコポプ）

ハナカジカ（スマプクンペ、ウッカコリペ）

ウグイ（オトゥヤッケ、スプン）

ヌマガレイ

川底をすみかとする魚たち

大きく分けて川底をすみかとする魚と、川の水の中に浮かんで暮らす魚とに分かれます。

川底派には、ハナカジカ、フクドジョウ、ウキゴリ、ヨシノボリ、ヌマガレイなどがあります。ただハナカジカ以外は、ふ化後しばらくは泳いで成長してから底で暮らすようになるといわれています。

また、フクドジョウは夜には水中にでて活発に行動します。

ハナカジカ（スマプクンペ、ウッカコリペ）

フクドジョウ（オンネチェプケウスツ、チチラカイ、レクシチュッポ）

ヨシノボリ（アカムコルペ、アカムシチェプ）

ヌマガレイ

卵を産む場所 ー 石の底、泥の底、水草

卵を産む場所も様々です。よく似た魚でも、少し違うところを選んでいることがあります。けんかした結果なのかけんかしないためなのか、それとも別の理由なのでしょうか。

サケとカラフトマス

サケ〈シロザケ〉(チェプ、シペ、カムイチェプ）ー砂利の底で、わき水のある所。
秋から冬に産卵

カラフトマス（トピウ、エモイ、ヘモイ）ー砂利の底で、水がしみこむ所、わき水はいらない。
夏から秋に産卵（撮影:堤公宏氏）

フクドジョウとエゾホトケドジョウ

フクドジョウ（チチラカイ、レクシチュッポなど）ー小石の底。石の底に集まって産卵。
春から夏に産卵

エゾホトケドジョウー水草に産み付ける。
初夏から夏に産卵

イトヨとイバラトミヨ

イトヨ（アイウシチェプ、ロコム）ー小川で砂や泥の底。水草の繊維などでトンネルを作る。
春から初夏に産卵

イバラトミヨー浅い場所の水草の茎。草の破片で穴の開いた球形の巣を作る。
春から初夏に産卵

昼と夜とでいる場所が変わる

魚のいる場所はある１日の中でも変わる場合があります。餌をとる時には動き回る魚も、休息する時には陰や流れの少ない場所に移るのです。ヤマメやウグイも夜になると川岸の植物の中や川底の石などに身を寄せて寝ていることが多いといいます。

昼

川水の中に浮いて泳いでいる

底の石の下に身をひそめる

ウグイ（スプンなど）

フクドジョウ（チチラカイなど）

夜

川岸の水草や底の石の陰で寝る

川水の中に出て活動する

一生のほとんど海で暮らすサケ

魚は、卵の時、幼魚の時、成長する時、成魚の時、産卵の時、季節によってすむ場所を変えます。

サケはふ化して４ヶ月もすると海に出て、平均３～４年海で暮らし、その後産卵して死ぬためだけに川に帰ります。

参考文献

「北海道の川に棲む 魚たちの話」 妹尾優二　エコテック　1999
「山渓カラー名鑑 日本の淡水魚」 川那部浩哉・水野信彦 編・監修 山と渓谷社　1989
「北海道の淡水魚」 稗田一俊　北海道新聞社　1984
「野外ハンドブック・10 魚 淡水編」 桜井淳史　山と渓谷社　1981
「検索入門 川と湖の魚①」 川那部浩哉・水野信彦　保育社　1989
「検索入門 川と湖の魚②」 川那部浩哉・水野信彦　保育社　1990
「原色日本淡水魚類図鑑」 宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦　保育社　1963(1976全改訂新版)
「サケ・マス魚類のわかる本」 井田齊・奥山文弥　山と渓谷社　2000
「日本動物大百科 第６巻 魚類」 日高敏隆 監修　平凡社　1998
「漁業生物図鑑 北のさかなたち」 長澤和也・鳥澤雅 編　㈱北日本海洋センター　1991
「川づくりのための魚類ガイド」 北海道河川環境研究会　(財)北海道建設技術センター　2001
「川の生物図典」 奥田重俊・柴田敏隆・島谷幸広・水野信彦・矢島稔・山岸哲 監修　(財)リバーフロント整備センター編集　山海堂　1996
「図説 魚と貝の大辞典」 望月賢二 監修　魚類文化研究会 編　柏書房　1997
「自然復元特集４ 魚から見た水環境－復元生態学に向けて／河川編－」 森誠一 監修・編集　信山社サイテック　1998